

帰宅してきたその場所は、いつもと変わらないその場所だった。しかし、その日はいつもとは明らかに違う存在に出会ったのだった。そして時間を共にすることで、その存在は日常となる。あのときカフカが見ていた風景と私たちが物語を通して見ている風景を今ここにあるものを通して見つめる。

作品を通して、常日頃見ている風景やもの、わたしの周りに十二分にあるものや慣れ親しんだものを再度違った視点から再考、再構成する事で、それ等が新たなる風景になり得る可能性を探求すること、新しい風景をつくることや新しいもの同士の関係をつくることを試行する。

杉浦藍



## 「旅と支度」

彼が鳥と交わした契約。嘴が紙に擦れる様を思い浮かべる。鳥からは何の抵抗も受けずそれは行われた。一方的な取り決め、意味付けはそれをされた当人には全く理解されていない。物質や他者についての意味付けは私たちの日々を形作っている。

意味の断片を見つめる。これはどんな意味の中にあった物なんだろう。私はそれを拾って旅の準備をしよう。物は私とどんな契約をするだろう。その先にいたであろう契約者はどのような者か。それは過去の契約であり新たな契約でもある。物は私にかつて行われた契約を伝え、外へと導く。

嘴が紙に擦れる様を、その手触りを確かめること。彼が鳥と交わした触感を、かつて物が誰かと交わした契約の触感を私の身体に重ねた時、私が私であってそうでもないその辺りで、あるリアルさを感じるとしたら、それは一体何と名付けたらいいのだろうか。

箕輪亜希子



PM6:00, AM8:00 のメモ

夕方に帰宅するという状況は、この世の社会に属している時間を想像させる。

実際にフランツ・カフカは定職に就きながら、自宅で小説を書いていた。そういう作家の一面は私を含め、現代の作家にも共通している。

カフカは社会に属することに或る種の欲求を持ちながらも、制作に十分な時間を確保できない生活に苦難し、民族性に関する排他的な感情を常に持っていた。その不自由さが文章の断片にみてとれる。しかし、絶望的な孤独のなかに、ただ一瞬、別の世界に触れられたかのような感触に充実感を得ていたのかもしれない。

私はこの小説を通して、カフカという作家やその背景にあるものをみた気がする。憧れの地に飛び立つ為の羽は、空へ向かうものではなく、常に重力から解放されること無くこの世から離れられない気がした。むしろ、離れようとしなのではないか。あるいは、飛んだところで、着地する場所を見つけられるのだろうか。部屋のなかでの練習は、窓のすぐ側で不安定ながらもしっかりとこの世（土地）を捉える。そして原文を変換した小説では、この世から僅かに浮くが、重力に逆らうことなくこの世（土地）に辿り着く。たとえ家から出たとしても、ここではないどこかへ行けはしない。そう思った。小説に描かれている憧れの地とは、ここではない別の場所のようだが、外へ連れ出してくれそうな何者かと出くわすこと、生活（住居）を支えているのは他でもなく、ここでのできごとなのかもしれない。

益永梢子

フランツ・カフカ(Franz Kafka, 1883年7月3日 - 1924年6月3日)は、出生地に即せば現在のチェコ出身のドイツ語作家。プラハのユダヤ人の家庭に生まれ、法律を学んだのち保険局に勤めながら作品を執筆、どこかユーモラスで浮ついたような孤独感と不安の横溢する、夢の世界を想起させる[1]ような独特の小説作品を残した。その著作は数編の長編小説と多数の短編、日記および恋人などに宛てた膨大な量の手紙から成り、純粋な創作はその少なからぬ点数が未完であることで知られている。

見えているものが、見えるとおりに存在するわけではないことは、  
もはや使い古されたフレーズだけれど、  
私の制作においてしばしば登場する（ここでは現れる、といってもいいかもしれない）  
ハサミは、ときに鋭く、ときになめらかに、  
目の前のものを切り裂きながら、そのことを示してくれる。

平たい物質。あるいはその集合体。

ときには指先から伝わる感触の向こう。例えば、物語に向かって。

本のあいだに嘴を突き刺す、このとり風の鳥のように、  
切り開く先はまだ充分に残されていると、  
その刃が音をたてる。

渡辺泰子

